

一見普通のどこまでも続く広い海(でも、監視台が浸かってしまっている)、堤防に描かれたきれいな絵(でも、書く必要がなかったもの、昨年までは。)、がなんとも物悲しかった。骨組みだけ残った家々にも怖いくらいに美しい色の花・魚などが描かれている。小さい子供たち、地域の方々が少しでも明るく元気な町が戻ってくるように、ということで描かれたそう。横には本来子供の笑顔と元気に走り回る姿が在るはずのグラウンドに瓦礫が積まれ、誰もいない学校があった。

テレビの放送、新聞報道、人からの伝聞(つまり噂)。私たちの耳に入る情報は様々なツールがあるが、それ毎に内容は異なる。「大変なんだろうな」と、これまでは、正直どこか人ごととして見ていた部分があった。それと同時に、人伝いの情報だけでは何を感じるべきで、何を考えるべきか、本質を見失いそうだった。今回の企画に参加したのには、一度自分で現実を捉えたいと考えたからだ。このような機会をご提供いただいた校友会の委員の方々に心から感謝申し上げます。

郡山〜いわきに向かい走るバスの中で、当たり前のようにバスガイドさんが言っていた
—ここでは何千人という方が亡くなったそうです—

—一時帰宅が認められました。

—ヨウ素剤が配られた地域では…配られなかった地域も…

さらりと言われすぎて、思わず聞き逃しそうになった。

また、自分の家が流されたにも関わらず、その状況を丁寧に紹介して下さった校友の遠藤さん。本当は話すのもつらいはず。それにも関わらず、「淡々」という言葉が相応しいかどうかはわからないが、説明して下さった。その淡々としているさまが、自分たちが知らない現実がもつとたくさんあり、心中から言葉を丁寧に選びながら説明をいただいているのだ、と感じた。

スパリゾートハワイアンは、全く震災を感じさせない様相であった。その裏には強い気持ちとそれによる結束力があつた。地域のみんなで復活に繋がった.アクアマリンの館長の一言。—自分たちのところから出た瓦礫は自分たちのところで…「福島」というだけで外に持ち出すことができない。自分たちで活用するとのことで、ステージができあがっていた。

震災(自然による災害)+αの災害。福島 of 皆さんから聞こえてきたのは、一企業に対することではなかった。現実を受け止めた、ここで生きていくための未来のことだった。その想いをこの目と心に焼き付け、自分たちの未来をどのように生きていくのか、どのように創造していくべきか、自分なりに考えてみたいと思う。

以上